

賢司

本山

Motoyama
Kenji

白
抱月
熊
を
いた

中央公論社



本山賢司
Motoyama Kenji

中央公論社

しろ つき
白い月を抱いた熊 くま

一九九六年一月二五月初版印刷
一九九六年二月七月初版発行

著 者 本 山 賢 司
もとやま けんじ

発行者 嶋 中 鵬 二

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二・八・七

電話 販売部〇三(三五六三)一四三二

編集部〇三(三五六三)三六六四

振替 〇〇一二〇、四、三四

印刷 大日本印刷

製本 大日本印刷

Printed in Japan CHUOKORON-SHA, INC.

©1996 KENJI MOTOYAMA

ISBN4-12-002646-9 C0093

定価はカバーに表示してあります。

落丁本・乱丁本はお手数ですが小社販売部宛お送り下さい。

送料小社負担にてお取り替えます。

目次

白い月を抱いた熊	5
青い水の銀河	61
座る牝牛	91
ゆで卵	115
瞳子の静かなくらし	137
原野へ	169

装帧
下川
雅敏

白い月を抱いた熊

白い月を抱いた熊

赤茶けた小櫓こぐるの葉が揺れ、紙屑が擦れるような音を立てた。その小さな振動で、ドングリが笠から剥れ落ちた。木の実は、小櫓の根もとで膝撃ちの構えをしていた前田吟次まへだぎんじの、帽子のひさしにあたり、ボンと鈍い音をたてて弾けた。秋のはじまりの小さな贈り物だったが、前田の心臓は驚きのあまり、喉から飛び出るほど律動した。こめかみがどくどくと脈うった。しばらくして、波が砕け散るような驚愕が治まると、彼は口を開けてゆっくり息を吐いた。接地している右膝の皿が、地面の湿気で濡れていた。しかも痺れがきて無感覚になっている。やたらにビクついているし、足まで痺れている。このことは今自分が置かれている立場を悪くすることはあっても、決してよくすることはないと前田は思った。

構えている猟銃にすぎるような視線をおくり、前田は動揺している精神の安定をはかった。銃の手入れだけは怠らなかつた証拠に、ガンオイルで磨いた青黒い鋼は、鯨の背のような鈍い光沢を放っている。梢から漏れ落ちてくるかすかな日を受け、定規で引いたような光の線が一本、銃身に刻印されたようにくつきり走っていた。

前田はもぞもぞと動き、左右の膝の位置を変えた。たつぷり積もった落ち葉は物音を吸収したが、上着の裾と銃身が立ち枯れた蓬よもぎの茎に引っかかり、気忙な音を立てた。自分が立てた無様な音に舌打ちをし、さらにその音の意外な大きさに気がつき、甲羅に首を引っ込める亀のよ

うに、あわてて首をすくめた。前田の脳裏に、頭の田中源太郎（たなかげんたろう）の言葉が浮かんた。

……「月の輪ってえ奴は一〇〇キロぐれえはあるでつけえ図体をしていても、藪を漕ぐときにあ、カサリとも音を立てねえんだ。絡まるように笹が生えてたつておんなじでな、わしは長いこと月の輪を追っているが、あれだきゃあ、どうしても分からねえ不思議のひとつだ……」

熊狩りでは新米ということ、前田は嫌というほど自覚していた。三度ばかり勢子で参加していたので、撃ち手組みにまわされたときは、背筋をぞくぞくと興奮が走った。まかされたポジションは、後方の無線係だった。熊狩りの無線係は射手と勢子の動きを、頭の中に全体像として常に描いていなければならない。ただし実際のところは、傍らにはいつも頭の源太郎が控えていて、射手や勢子の位置の確認や、移動の連絡などの的確な指示を出していた。

無線係は前田の生業が電気屋というので、お鉢が回ってきたらしい。最初はや々と鉄砲が撃てると勇んでいたのに、拍子が抜けた。しかし、最初の猟のときは無我夢中で、緊張のしつぱなしだった。大声を張り上げる勢子の仕事は、それなりに恐怖心を発散させる効果があったことを、いやというほど思い知らされたのだ。無線係で出猟したのは、これで二度目だった。

今回は、いつも前田の横に控えている源太郎がいなかった。昼過ぎ、洗濯機の配達からものと、農家近くに熊が出没したという情報飛び込んできた。伝令が源太郎のところから次々に発せられ、急遽、有害鳥獣駆除の態勢が組まれた。この日は、駆除の許可がおりた日程のなかでも平日だったので、何とかやりくりして五人の頭数をそろえるのがやっとだった。少人数

の関係で、いつも隣に控えている源太郎は射手にまわった。後方とはいえ前田ひとりが陣形から外れ、ぼつんと残されてしまった形になっていた。

源太郎が横にいないというだけで、前田は心底怯えている自分に気がついた。これは紛れもなく、自分が臆病だということだ。小さな異変を感じると、伸ばした触手を素早く引つ込めてしまう腔長動物。そうだ、俺はまるで磯巾着いそぎんちやくみたいだ、と前田は思った。それを証明するように、風に揺らぐかすかな葉音や、足もとに蟊蛙ひきがえるの黒い影がのそりと現れただけで、黒い獐猛な影が前田の脳裏を錯綜した。熊の恐怖は重圧となって、前田を押しつぶそうとする。そのたびに、羽毛をむしられた鶏の皮のように、皮膚が粟立った。

前田がびくびくしながら潜んでいる雑木林は、福島県の山間部のS村の外れにあった。畑とK川には生まれた雑木林は、上流に沿って細長い長方形を描きながら、稜線へとつづいていた。林には振袖柳ふりそでやなぎや榎えのき、ドングリの結実した小檜が生えていた。林床は野茨のいばらや東根笹あずまねざさの藪に覆われて歩きづらかったが、獣道のような細い踏み跡が何本か川岸まで横断していた。

K川はS町の外れで大きく湾曲しているので、上流から吹き下ろしてくる風と、畑から流れ込んでくる暖められた空気がよくぶつかった。そのため、朝晩はよく霧がかかる。雑木林の中に吹く風も、気まぐれに突然方向を変えることがあった。

今、その風が林の中に吹き込んできた。風は振袖柳の梢にあたり、小さな葉を揺らした。枝と葉に拡散された風は藪の灌木をさざめかし、微風となって前田の背中をさすり、前方に優しく流れていった。

突然、ガリガリという音がした。またもや前田は卒倒しそうなほど驚いた。それと同時に、腰のベルトにかけていた無線機からカン高い声が響いた。

「こちらAポイント、聞こえますか、どうぞ？ ……聞こえますか、どうぞ」

前田はシャツの袖で額の汗をぬぐった。無線機をベルトから外し、声を潜めて答えた。

「こちらCポイント、聞こえます、どうぞ」

接続が悪いらしい。Aポイントの音が、途切れて聞こえる。「奴さんは、……どうも上流へ抜け……、様子です……。どうぞ」

「了解」前田はトーキングボタンから指を放し、両肢を前に投げ出して坐った。大きなため息をひとつつく。と、またガリガリという音がして、今度はBポイントから連絡が入った。

「こちらBポイントです、Cポイント応答願います、どうぞ」

前田が答える。「こちらCポイント、感度良好、どうぞ」

「えーこちら、接触なし。足跡の確認はとれてませんが、クマは上流へ向かったと思われます。Bポイント組は、そちらへもどります。どうぞ」

「了解しました」首に巻いていたタオルをはずすと、前田は首をぬぐった。シャツの襟を開け、胸までしたたった汗をふいた。ひと息ついてから見あげると、振袖柳の梢から、鰯雲の浮かんだ秋空が見えた。

有害鳥獣駆除班は、前田を頂点にして三角形を描きながら散開し、雑木林をゆっくり前進していた。これは通常の熊狩りの態勢とは、ずいぶんちがうやり方である。山岳部の森林が伐採

されたり、開発によって棲み場を失ったり、冷害で山の木の実が不作だったりして、熊が里に下りてきたときの緊急の態勢だからである。この組み方は熊を射殺するというよりは、前方、つまり上流に追いやって山に戻すという意味合いを強く持っていた。今回の出猟はどうやらその目的を果たしたらしく、三角形の底辺の二点、BとAポイントの各二名ずつが、連絡のあと前田の方に戻りはじめたのだった。

前田の汗の匂いを運んで来たかすかな微風を捕らえると、熊は「伏せ」の体勢をとった。前肢をやや開いて前方に投げ出し、腐葉土に体を密着させるようにしてうずくまった。が、後肢の爪はしっかりと地面に立て、いつでも動き出せる用意はしていた。小さな眼を落ち着きなく動かし、鼻面を地面にこすりつけている。風の匂いが微妙に変化するたびに濡れた鼻腔を広げ、まるでパラボナアンテナのように、鼻面を左右に動かした。

四歳になるこの月の輪熊は、陽気に誘われ山から迷い出てきたのだ。雑木林を探索していて、朽ちた赤松の幹の下で、大好物の棘蟻とげありの蟻塚を発見した。熊は背を丸めて坐り込むと、朽ち木を爪で掘り起こした。長く柔軟な舌を器用に使い、夢中になって棘蟻を貪った。しばらく悦楽の時を過ごしていたが、熊はふと不穏な気配を感じた。頭をもたげ風を嗅いだ。それから神経質そうに、林の全景を見わたした。

だが、迫り来る気配の主は音を立てず、風下の左右後方から忍びよってきていた。熊はあまり眼がよくなかった。頼りにしている敏感な鼻は、熊が風上に位置していたため役に立たな

った。さきほどの気まぐれな弱風が運んできた、前田のかすかな汗の匂いはすっかり消えていた。熊はくぐもった豚のような声をだし、ふたたび大好物の棘蟻を舌ですくいはじめた。くちやくちやと音をたてて、棘蟻を舐め取ってゆく。熊の頑丈な上下の顎には、氷山のような大白歯が並んでいて、軽く噛み合わせるだけで棘蟻の固い頭はつぶれた。甘酸っぱい蟻酸が、鋭い牙の谷間を流れ落ちてゆく。

しかし、何かがちがつていた。熊は不安げに丸い耳を立てた。ほかの哺乳類なら口の両脇や眼の上に生えた髭がアンテナのように働き、空気のわずかな振動でも捕えるのだが、生憎のことに熊にはそんな髭がなかった。というわけで、夢中になっていた熊が、ようやくかすかな物音を捕らえたときは、すでに遅かった。木立を透かして、恐ろしい影がゆっくり迫っていた。熊は恐怖にかられ、その場に俯した。耳をぴたりと伏せ、体を出来るかぎり小さくした。蟻塚を容赦なく破壊した刃物のような爪が、恐怖で小刻みに震えていた。

どのぐらいそうしていたらう。殺気立った気配と人間の放つ臭気は、何事もなかったかのように通り返っていった。窮地を脱したと思った熊は、影がやって来た風下の方へ、静かに歩き始めた。脚の平の、ぼつてりと柔らかい掌球が、腐葉土を踏みしめる音を消してくれた。

風が変わった。そしてその微風が運んできたのは、ちよつと前に嗅いだ、あのかすかな匂いだった。熊は本能的に立ち止まり、両膝を曲げ立ちあがった。新しい匂いは前田の汗の臭気を、たつぷり含んでいた。それは耐え難い恐怖をも運び、敏感な熊の鼻の粘膜に粘りつくように刺激した。

熊の恐怖心は耐え難かったが、最初るときより少し落ち着いていた。再び地面に伏せ、匂いが消えるまで待つことにした。じつと潜んでいると、今度は後ろから無遠慮に腐葉土を踏み鳴らす音が聞こえてきた。熊は耳を立てて、後方に首を巡らした。褐色の虹彩を縁どる白目に毛細血管が浮き、挟みうちになった熊の恐怖心を端的に表していた。先ほど通過していったときは、音の主は恐ろしい静けさを秘めていたが、今は大胆に土を踏み、藪をかき分けて熊の後方に迫ってきていた。熊は抜きさしならない緊迫した状態に震えながら、懸命にこの事態に耐えた。うなじの毛が逆立った。波を打ちながら背中を走り、黒い津波のように小さくて丸まっちい尾の先にまで達した。

それは短い間隔で起こった。

まず最初は、射手が立てた金属音だった。頭の源太郎と前田以外は、みな散弾銃にひとつ弾を込めて使っていた。集合地点に近づいたので、めいめいが担いでいた銃をおろし弾丸を抜き始めたのだ。開閉レバーをずらし、銃身を開放し、実包を取り出す。ベストのポケットに実包を入れると、銃身をもとの位置に戻す。そのとき金属が接合する、かん高い金属音が響いた。

火打ち石を叩き合わせたような断続的な金属音は、耐えに耐えて張りつめていた熊の神経を断ち切った。熊の小さな脳に落雷のような亀裂が走り、恐怖の火花が散った。腐葉土に食い込ませていた爪をふんばり、熊は一気に走り出た。強靱な後肢の筋肉の束が躍動した。七〇キロの体を鞭のようにしなやかに波打たせた熊は、二〇メートル離れていたにも拘わらず、一瞬にして前田の前に到達した。

眼前に突然現れた黒い塊。ひと呼吸おく間もなく、それは前田の視界いっぱいに広がった。つぎの瞬間には、濡れた鼻面と血走った褐色の眼が見えた。その残像も消えぬうち、頭蓋骨に軋むような打撃を受け、前田の眼底が急速に白い閃光に覆われた。

ぶん殴りやがった、と前田は思った。途端に何かが目のうえにずり落ちてきて、視界がきかなくなった。前田はその目隠しをぐいと左手で押し上げ、銃を構えた。全てがスロウモーションのような動きに感じたが、銃を構えると照星の向こうに、熊の丸い尻が見えた。意外にも恐怖心はなく、前田の意識はとき澄まされていた。

頭の源太郎は、前方の藪から黒い塊が飛び出したときに、全てを悟った。伏せていた熊を見過ごしていたのだ。抜かった、と思った。ふつうなら音を立てるはずもない熊が、藪を蹴散らすようにしたので、小枝が突風で引きちぎられるような音がした。源太郎はライフルを構え、遊底を引こうとした。が、無線係の前田が射線上にいることに気づき、遊底のボルトレバーから手を放した。そのとき前方から、肺を押しつぶしたような呻き声が聞こえた。一拍おいて、乾いた銃声がした。つづいてもう一発。銃声は雑木林の大気に吸い込まれ、鈍く、低く、空気を震わせた。逃がしたな、と源太郎は思った。

手負いを出してしまうと、面倒なことになる。銃声が一発なら、まず獲物を仕留めたと思ってまちがいが無い。しかし、すぐに二発目を発射していると、初弾を外した可能性が高い。源太郎は熊の逃げ去った方角を見て、そう思った。走り寄ると、片腕を地面について喘い